

## 「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみるゝ知の継承と明治初期の女性教育 ——

榊原 千鶴

### 一、はじめに

文久元年（一八六一）八月、大阪中之島で家塾を営む跡見花蹊のもとに、父重敬が仕える姉小路公知より一通の書状が届いた。書状には、皇女和宮の將軍家降嫁にあたり、花蹊を付人として推挙する声のあることが記されていた。跡見家では両親をはじめ親類一同、「此時節にハ実に一大出世とて皆々悦び居たり」①（略歴「花蹊日記 第八号」）という祝福の雰囲気包まれたが、結果的には公知の意向により、花蹊は付人を辞退することになる。その経緯を、日記と自身がまとめた略歴二種それぞれに、花蹊は次のように記す。

此朝、京姉小路様より文参り、私江戸行二付、殿様ひどく御  
（思案）  
 しやん遊され候へども、先々画のこちらにて盛相成ゆへ、余  
 りおしき物と御申遊し、先々やめるがよいと御申遊し候て、  
 文参り候。

（『花蹊日記』文久元年八月十日条）

是ハ伏原大納言よりの御進めニ候処、公知卿ハ、和宮様の御

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみるゝ知の継承と明治初期の女性教育 ——

（榊原）

一方の花よりも、世界の花となれ、と仰せられて、直に御断申上る。（略歴「花蹊日記 第八号」文久元年八月六日条）  
 又、姉小路様より文参りて、和宮様の花よりも、世界の花とならむ事を望む、よつて此度ハ止むべし、と仰せられて、早速御断りす。（略歴「花蹊日記 第九号」文久元年八月六日条）  
 日記からすると、公知の判断は、絵画の才が花開きつつある花蹊の現況を慮つてのものと理解できる。だが、理由はおそらくそれだけではないだろう。翌年十月、花蹊の父重敬と弟重威を共に、公知は幕府への攘夷督促の副使として、正使・三条実美とともに江戸に向かう。後の明治政府において、最高官の太政大臣を務めた実美とは異なり、公知は文久三年（一八六三）に暗殺され、志半ばで世を去ることとなる。とはいえこの時期の公知は、実美同様、尊王攘夷派の公家を代表する存在であり、和宮降嫁には反対だった。辞退の背景には、花蹊の将来への配慮だけでなく、そうした公知の政治的立場があったと推測できる。

だが同時に公知が、花蹊の「才」に期待していたのも事実だろ

う。すでに大阪の地で、富豪の娘たちに漢学・書画を教授し、その学才を知られていた花蹊に、公知はある種の可能性を見ていたのではないか。そうした公知の思いを窺わせるものとして、花蹊が自筆略歴に書き残した「世界の花」ということは、公知にとっては花蹊に寄せる期待の大きさを、花蹊にとっては立志と自負を、それぞれ象徴するものだと考える。父重敬は、勤王の志により、姉小路家に仕えることとなったという。その父の娘であつてみれば、このことばの裏にある公知の思惑を、花蹊も暗にそれと察していたのではなかったか。公知亡き後、花蹊一族を庇護し、跡見開学に力を貸した三条実美の動きは、尊王攘夷派の公家が花蹊に期待した政治的な役割を想像させる。

公知が望んだ「世界の花」への道を、果たして花蹊はどのような歩もうとしたのか。本稿はその歩みを、花蹊自身の思い、教養、跡見学校での教育活動、花蹊を取り巻く人々、という四つの面から立体的に捉えることをめざす。対象とするのは、主として明治初期ではあるが、花蹊という教育者のありかたを素描する試みは、女性教育におけるモデルの提示としても有効であると考ええる。

## 二、「立志」の人

天保十一年（一八四〇）四月、跡見重敬・幾野夫妻の次女として花蹊は大阪に生まれた。幼少より聡明であったとはいえ、重威、

愛四郎という男子があつたにもかかわらず、両親は花蹊に跡見家再興の期待を寄せたという。

汝、わが家を興すべき人物なれ。されバ、女ながらも他に嫁せずして、わが家を継がしむべしなど、花蹊幼少より、他に嫁せずして、わが家を興すべき義務を自覚し、ひたすら技芸の修養に熱心なり。（略歴「花蹊日記 第九号」）

父が営む寺子屋で、姉の千代滝とともに代稽古を担当し、算術のほか『実語経』『女大学』『女庭訓』などを教材に漢文の素読と習字を教えていた。安政三年（一八五六）十七歳の時には京都に遊学し、さらにその二年後、大阪でも師を得たことは、花蹊の勉学に懸ける思いの強さを表す行動と言えよう。京都では、宮原謙蔵（節庵）に漢学と書を、円山応立に絵画をそれぞれ学び、大阪では後藤松陰に就いた。留意すべきは、節庵と松陰がともに頼山陽門下であり、花蹊自身も「山陽の孫弟子」<sup>②</sup>を自任するほど、その学統に私淑していたことである。そうした花蹊のありかたは、厚い勤王の志ゆえに姉小路公知に仕えたという父にふさわしいものだった。『女子習字帖』にも、花蹊は強い勤皇の思いを書き付けている。

大君の御心いかにおはすらむ

をみなかしこさわかみなるかも

女なりとも勤皇にかはりあらむやと、人には言はじた、知るこの日記<sup>③</sup>

実際のところ花蹊は教育現場でも、校内に天照大神の祭壇を設置し、生徒に礼拝させている。明治十一年（一八七八）、開校三年目の記念日に捧げられた祝詞形式の祝辞<sup>④</sup>にも、花蹊の思想傾向は明らかである。祝詞のなかで花蹊は、建学は天皇の命によるものであるとし、「天皇命の公民」である女性たちが、穢い心を持つことなく悪い道に入ることのないようにと、教育の道に勤しんでいると記す。自身の教育活動へのこうした意義付け、および建学の精神は、明治期に創られた女学校のなかで跡見を特徴付けるものでもある。

花蹊は、明治天皇の御聖徳を偲ぶものとして、御製百首をかるたに書き残すとともに、自身の教育にかける思いを、御製を彷彿とさせる歌に詠んでいる。<sup>⑤</sup>

#### 教育

八二 野末まで種をまかなむ教草いまだしげらぬかたもこそあれ

八六 たゞしくもおひしげらせよ教草をとこをみなの道をわかちて

#### 庭訓

八七 いつくしとめづるあまりになでこの庭のをしへをおろそかにすな

八八 たらちねの庭のをしへはせばけれど広きよにたつともとゐとぞなる

（『明治天皇の御製百首』）

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみる知の継承と明治初期の女性教育 —— （榊原）

#### 教育

花となれ実となれ庭のをしへ草しげきめぐみの露のしづくにわが命あらむかぎりはをしへ草をしへてやまじ実を結ぶまで

（『花蹊女史の遺稿』）

明治天皇の教育にかける思いを、実際の女性教育の場で実現していくこと。そこに花蹊は、自身の教育活動の意義を見ていた。

たとえば、明治十年代に作られた「烈女」の名を冠するふたつの書、『統明治烈婦伝』（明治十六年）と『古今烈女伝』（明治十九年）は、いずれも花蹊を取り上げている。

花蹊ハ摂津ノ産ニシテ、博学高才ノ名アリ。家塾ヲ東京猿樂町ニ開キ、跡見学校ト称シ、又三宜楼ト号ス。花蹊、書画ヲ善クシ、兼テ和漢ノ学ニ通ズ。是ヲ以テ門人頗ル多シ。高貴紳士ノ息女ニシテ、文筆ニ名アルモノハ、概ネ其門人ニアラザルハナシ。時ニハ衆クノ門人ヲ連レテ、宮中ニ召サレ、畏クモ御前ニ書画ヲ作ルノ榮ヲ得、又ハ支那公使ノ招待ヲ得、席上ニ揮毫シ、清客ヲシテ絶賞セシムルハ、実ニ希世ノ女史ト謂フベシ。

春の来て谷の鶯今日よりは 雲井にちかく名のりそめけり

（『古今烈女伝』<sup>⑥</sup>）

評伝とともに『古今烈女伝』が挙げる花蹊の一首は、美子皇后の御前で揮毫した際に花蹊が詠んだものであり、花蹊の代表歌として世に知られたものである。花蹊の名声が、まずは宮中、とりわ

け美子皇后による支援とともにあったことは重要である。同時にそれは、花蹊のみに多くをもたらしただけではなかった。

花蹊を称しての「烈婦」「烈女」とは、幕末に勤皇のために命を賭けて闘う女性をさすものであり、「志士」「烈士」と対になる名称である。関口すみ子はその点に関して、「女性像として画期的な点は、夫や子ではなく、天子、ないし勤王という大義に身を捧げることである」とし、そうした女性たちが、女権を排するという宮中の大改革に必要とされたと指摘する。

長年にわたり宮中では、天皇と外部との交信は、勾当内侍(長橋局)が勅旨を奉じて出す仮名の書状「女房奉書」によってなされてきた。天皇はずっと、女官たちに取り囲まれてきたのである。その天皇を女官から切り離すこと、つまり「女権」の排除は、尊王攘夷派が最初に手を付けた宮中改革だった。明治元年(一八六八)二月、大久保利通が三条実美と岩倉具視に提出した「宮廷改革に関する意見書」第一項で、天皇は女房たちの出入を禁じた表の御座所の御学問所で「万機の政務」を執り行うことが布告された。<sup>⑧</sup>同時に、天皇付き、皇后付きと分かれていた女房の別をなくし、後宮の権力をひとり皇后に帰すことが企図された。明治元年(一八六八)十二月の婚儀に際して、女御宣下のみならず皇后宣下まで行われ、当初から皇后として入内した美子皇后は、旧来の慣例を破る異例な存在だった。美子皇后は、大久保ら新政権の中核にあった者たち、さらに、三条実美、岩倉具視といった公家政

治家たちの期待を一身に受け、後宮という女たちの世界の改革実行者として登場したのである。その美子皇后入内の折り、女官として仕えることになった女性たちの中に、公知の妹良姫もいた。そしてこの良姫の後見役を務めたのが花蹊である。

ところで、公知亡き後も跡見家の人々が姉小路家に従ったのは、主家というだけではないもうひとつの理由があった。それは、公知の一子である公義の生母が、花蹊の姉千代滝だったことである。<sup>⑨</sup>外戚である尊敬はじめ跡見家の人々にとって、遺された公義を保護し、その成長を見守ることは、一家の望むところでもあり、責務とも意識されたことは容易に想像できる。花蹊は、幼い千重丸(後の公義)と良子を指導する様とともに、宮中に関わる出来事を引きつつ千重丸の成長ぶりを書き留めている。

千重丸様、准皇后様へ御兒子惜みに御参り有て、其節、花蹊御供す。准后様(皇太后宮)、親王様(陛下)御側にて御席書被遊、御褒美として結構なる御品々拝領、千重丸様御七歳之時也。(略歴「花蹊日記第八号」慶応二年三月十五日条)千重丸様、御用召ニテ御参内。先帝御前にて御席書沢山ニ被遊、御褒美拝領物沢山にて、実に珍しき事、花蹊も御供す。当時世間に大評判なり。

(略歴「花蹊日記第八号」慶応二年三月二十一日条)「当時世間に大評判なり」の一節に、千重丸の優秀さに目を細める叔母としての横顔を垣間見ることができよう。この六日後、千

重丸は晴れて元服の日を迎える。本来ならば加冠の役を務めたであろう三条実美は、この時、公武合体派の公家や薩摩藩、会津藩らが連動した文久三年（一八六三）の政変により、いわゆる七卿落ちのひとりとして京を追われていたため、代わって正親町三条がその役を務めた。

やがて明治三年（一八七〇）八月、御所からの召しにより東京に向かうことになった公義の傍らには、すでに還暦を迎えた重敬が付き添っていた。花蹊自身も、彼らを追うように、十一月には東京へと出立した。父の出迎えを受け、品川に着いたのが十一月二十九日、その三日後に花蹊は、すでに中央政府の中枢に返り咲いていた実美の許を訪れている。

三条様へ参り、久々にて拝謁、種々御物語申上る。三条様より御依頼の御襖四季花卉、揮毫にかゝる。また方々様より御たのみの揮毫ものにていそがし。

（略歴「花蹊日記 第八号」明治三年十二月二日条）

こののち日記には、宮中や外務省からも揮毫の依頼のあったことが記される。重要なのは、実美のみならず、宮中の人々にとっても、花蹊は期待される存在だったことである。関口すみ子は、宮中の大改革に際して、烈婦・烈女と称される女性たちが必要とされたこと、その代表的な存在として、美子皇后に婦道という儒教的道徳を教授した公家の娘で漢学者でもあった若江薫子を挙げる。その薫子とはやや異なる形で、すなわち、宮中のみならず市井の

学校でも女性教育に携わる存在としてあったのが花蹊だった。

### 三、教養の内実と教育活動

ところで、若江薫子もまた、花蹊同様『続明治烈婦伝』『古今烈女伝』に取り上げられている。薫子は、「建白女」と渾名されるほど、過激な尊王的政治的言動により知られた。やがてそうした言動が災いし、結果的には、流浪の果てにその生涯を閉じることとなる。薫子と花蹊、晩年の有り様は大きく異なるふたりだが、幼き日より身に付けた教養と、それを女性教育の場で活かそうとした点で両者は相通じる。たとえば花蹊は、早くから跡見学校に英語教育を取り入れはしたが、とはいえ上京直後には、次のような感想を抱いていた。

当時東京の形勢、戦後と云ひ、実に令嬢とも云べき人ハ、開化となへて、髪をザン切にして、長き書生羽織を着、<sup>（船）</sup>エン筆を耳に挟みて、ヘコ帯などして、実に殺風景を極む。予、この風体をみて、是を一変せねばと考ふ。女子教育の念甚し。

（略歴「花蹊日記 第九号」明治四年一月条）

花蹊は文明開化の流れに否定的だった。欧化の流れの前に、断固否を唱える強い意志が、花蹊をして自身の信じる女子教育の道へと邁進させた。

その花蹊が、幼き日より慣れ親しんできたのは、和学と漢学の



双方である。その点も、とくに漢学への造詣の深さが評判となり、美子皇后の学問師範に拔擢された薫子と似通う。美子皇后は、薫子の指導のもと、『論語』や『女四書』<sup>⑪</sup>をはじめとする漢学に親しんでいた。なかでも『女四書』を精読し、女性が国家に内助を尽くし、天下の国母たる皇后の在り方を説く『内訓』を自己の指針としたという。<sup>⑫</sup> いっぽう花蹊も、当時の女性には珍しく、宮原謙蔵、後藤松陰らに就いて漢学を極めようとしたことは先に記したとおりである。しかも花蹊自身、宮中で漢籍や習字の教授にあたってもいた。

御所宮内卿より御頼みにて、宮中典侍、掌侍の方々に漢学御稽古ニ参る事、土曜日より日曜終日、毎年。青山御所典侍、掌侍の方々に習字御稽古申上る。

(略歴「花蹊日記 第八号」明治五年二月二十六日条)

宮内御内儀より御頼みに相成、典侍様、内侍様、夕顔権典侍、早蕨権典侍、花松権典侍、芙蓉内侍、杜若内侍、玉椿内侍、楓内侍の方々、漢籍講読御稽古に参る。土曜より日曜毎々参る事と定む。(略歴「花蹊日記 第九号」明治八年九月六日条)

明治五年(一八七二)といえ、薫子はすでに塾居の身となり宮中を追われていた時期にあたる。皇后主導のもと、維新後の新しい時代にふさわしい宮中となることをめざす改革の動きに、花蹊もひと役買っていた。しかも花蹊の場合、そうした女性教育の実践は、当然のことながら宮中に留まらなかった。

花蹊が創設した跡見学校にあっても、明治八年(一八七五)の開校当初より、漢学は学課に含まれている。やや後のものとなるが、明治二十七年(一八九四)課程表<sup>⑬</sup>にも、本科四年級に「春秋左氏伝、中庸、史記列伝」、三年級に「論語、文章軌範、劉氏烈女伝、元明史略」、二年級に「十八史略、小学句読、孟子、女四書」、一年級に「蒙求、大学、十八史略」が挙げられており、『女四書』の書名も確認できる。薫子が「婦道」の重要性を説いたと同じく、花蹊もまた、女学の必要性を思い、跡見の教育に活かしていた。

ただしここで留意すべきは、関西出身の花蹊とその一家が営む当初の跡見学校には、お国なまりをはじめとして、京風の雰囲気が漂っていたことである。明治五年(一八七二)二月には竹橋に国立の東京女学校が、明治八年(一八七五)十一月には官立の東京女子師範学校がそれぞれ創設されたものの、公家の娘や尊王攘夷派に近かった藩公の娘たちは、こぞって花蹊のもとに集った。私立女学校として開校された明治八年(一八七五)以前の私塾時代、すでに次のような盛況を呈していた。

今日迄に入門する華族の姫たち八十余名に達す。日々入門を乞ふ者、識が如し。

(略歴「花蹊日記 第九号」明治七年十一月二十五日条)

もちろん、花蹊の学識への信頼は当然のことだろう。だがそこには、東京の女学校にはない京風の雰囲気に「雅」を思う一面も

あったのではないか。実際のところ跡見では、宮中の儀式の際に着る緋の袴に倣って、生徒には袴をはかせ、髪結び方も優美で高尚だという理由で、京都の稚児髷を結わせたりしている。<sup>14)</sup>

さらにこの時期の跡見が、公家や藩公の娘たちといった上流の女性たちが通う学校としてあった点、そして花蹊自身、そうした自校の特色を明確に意識していた点は見逃せない。少し下るが、明治二十一年（一八八八）の改築の主旨に以下の通りある。

抑モ一国ノ富強ハ教育ニ依テ興リ、教育ノ盛衰ハ女学ヲ以テ徴スベシ。況ヤ我校ノ任タル、上流淑女ノ教育ニアルヲ以テ、務メテ窈窕嫺雅ノ女徳ヲ養成シ、智ヲ研キ交ヲ弘メ、以テ我邦女風ノ模範タラザル可ラズ。

（明治二十一年「跡見女学校改築之主旨」）<sup>15)</sup>

「上流淑女」のための学校として、彼女たちに「女徳」を身に付けさせ、もって我が国の「女風の模範」たることを願う。それが花蹊のめざしたところであった。

花蹊の明確な教育方針はその教育内容にも反映されている。明治八年（一八七五）一月八日、晴れて開校式を迎えた記事には次のとおりある。

昨暮より学校建築、落製ニ付、八日吉辰を以て開校式執行す。華族の方々姫方等も来賓の多き、実に驚人たり。これより跡見女学校と称して、女子教育に従事する。国語、漢籍、算術、習字、絵画、裁縫、琴、插花、点茶之九科目とす。

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみる、知の継承と明治初期の女性教育 —— （榎原）

七

（略歴「花蹊日記第九号」明治九年一月八日条）  
学科課程表によれば、漢文読書は、第一年で「大学、論語、中庸、孟子、国史略、十八史略」週十四時間、第二年で「易経、書経、詩経、礼記、日本外史」週十四時間、第三年で「左伝、史記」週十四時間、習字は、第一年で「草体」週七時間、第二年で「行体」週七時間、第三年で「真体」七時間となっている。

たとえば櫛田眞澄<sup>16)</sup>は、明治期の女学校を概観するなかで、跡見を「教養主義系女学校」と位置付け、明治三十二年（一八九九）発布の「高等女学校令」以降、数多く設立された教養主義女学校の先駆けでありモデルともなつたと指摘する。さらにその特徴として、当時の上流階層の娘たちにとって情操を養うためとされた芸事を、学校という場でまとめて身に付けさせた点や、漢文読書と習字の時間数の多さを挙げている。後者に関しては、当初使用されていた漢文の教材に、男性向けの教養とも部分的に一致させる意図が窺えるとし、「それは嫁ぎ先の男性や家格に適応できるための花嫁修業的な教養であった」と論じている。

たしかに、婚家の男性への対応に漢文学習の意味を認めることはできよう。だがはたしてそれだけだろうか。少なくとも花蹊個人に限って言えば、花嫁修業的教養というのは当たらない。京都、大阪に漢学の師を求め、勉学に励んだ花蹊にあっては、より深い精神性、自身のモラルを形作る必須の教養としてあったはずである。このことは、『女四書』を精読し、自己の指針とした美子皇

後のありかたとも重なる。もちろん、跡見の生徒が何をどこまで吸収し得たかは分からない。美子皇后にしても、最終的に目指されたのが、国母たる理想的な皇后像であったとするならば、他のための生き方に留まるものと片付けることもできよう。だが、漢学同様、跡見で重視された習字に、花蹊が込めた思いを振り返るとき、そこで培われる「自律」の精神は重要と考える。

跡見の教育において、師花蹊と生徒を結ぶ重要な教材に折り手本があった。その折り手本を紹介、研究するなかで植田恭代は、入学後まもなく手渡された手紙文を本文とする初級折り手本「四季のふみ」をめぐるある卒業生の思い出を紹介している。

師の君は御手本を開かれながら、「この仮名文字は唯徒に優しいのみではありません。優しい中にもしつかりとした筆法ではありませんか。女子は従順にして、且内に凜乎たる意志を持つ可き事が示されてあるのです」と御訓し下さったのです。私はこの御手本、この御言葉を通じて、跡見心の神髄に触れた思が致し、実に私<sup>(マ)</sup>の胸に気高い校風が培はれはじめた、第一印象として忘れがたいので御座居ます<sup>⑨</sup>。

「折り手本は習字の手本であると同時に、女性の生き方を説く教材となっていたことがうかがわれる」と植田が指摘するとおり、花蹊直筆の折り手本は、内容のみならず、書かれた文字の姿を通して、師の思いを生徒に伝えるものだった。

たとえば、明治四十年（一九〇七）に跡見女学校を卒業した岡

本かの子は、習字をめぐる思い出を書き残している。

習字の時間に、私が筆筭といふ字を少し傾けて書いたのを見て、「そんなゆがんだ筆筭では、嫁入りの時、持つて行けませんね」と言われた。斯様に一見優しく訓戒されるのであったが、その訓戒には、必ず深い意味があった<sup>⑩</sup>。

嫁入りを引き合いに出してはいるものの、教えの主旨は、文字が真っ直ぐあることが、心の有り様に通じることを伝えることではなかったか。凜乎とした女性たれという花蹊の教えが、その根底にはあったと想像される。家政を取り仕切る女性が、親類をはじめ対外的な人間関係を円滑に進めていく上で、時宜にあった手紙を書くことは重要な仕事であり、この時期の女性にとっては必須の教養とされた。その際、内容の適切さはもちろんのこと、字体の美しさが求められたのは当然である。女学校における習字が、そうした現実の要請を反映してものであることは間違いない。だが同時に、花蹊がかの子にかけたことば、そこに含意されたある種の精神性に通じる教えもまた思うべきだろう。

跡見が開校を迎える二年ほど前、越後長岡藩の家老の娘として生まれ、武家の娘として厳しい教育を受けていた杉本鉞子は、習字がもたらす教育効果について後に次のように記している。

お習字は大切な教養の一つとされておりましたが、それは唯に技巧にあったわけではなく——むろん、習字には絵画と同様な高い芸術的な魅力はありますけれども——複雑なあの運



筆を辛抱強く練習致しますことによって、精神力の抑制ということが練りきたえられるものと思われていたからでございます。精妙な筆のあやには、心の糸の乱れや不注意はおおうべくもなくあらわれますので、一点、一劃にも心を落ち着けて正確に筆を運ばなければなりません。このように心をこめて筆を運ぶことを通して、私共、子供は心を制御することを学んだのでございます。<sup>22)</sup>

習字によって鍛えられ、身に付けることができる「精神力の抑制」「心を制御すること」の自覚は、花蹊も同様だったのではないか。だからこそ、開校にあたって多くの時間を習字に割いたのではなかったか。花蹊は、和文漢文双方から自身で撰じた文章を法帖として生徒に与えた。生涯でその数は二万帖に及んだという。

道徳的な性格の強いものとしては、漢文系では『朱子家訓』『司馬溫公家訓』、和文系では『雲上女訓』『教育勅語』などが挙げられている。『雲上女訓』については、それが室町末期に成立した女訓書『からすまる帖』であること、跡見だけでなく、花蹊の序を付した刊本が広く一般にも流布したこと、その背景には福羽美静ら待講の存在があったことなど、すでに論じたことがある。<sup>23)</sup>花蹊が女性教育に懸けた思い、それを具現化した法帖は、女性の人格陶冶に意味あるものだった。

ところで、跡見開校時の教科をめぐることは、文部省の意向に反した面のあったことを、花蹊自身が記している。

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみる、知の継承と明治初期の女性教育 ——

九

文部省の反対後、間もなく費府に教育博覧会がありまして、日本政府へも学校製作品の出品を勧誘して来しました。当時文部省は裁縫、絵画に反対する位ですから、他に生徒の製作品がありません。余程困つた様子で私の学校へ何か出品して呉れと云つて来ましたから、絹地に彩色画を書いたり、又画の縫ひなどを出品しました。其れから文部省は裁縫絵画に反対しない所か、却つて賛成する様になりました。明治十年前後の事を考えますと実に可笑しいことばかりで御座います。<sup>24)</sup>

当初文部省は、裁縫や絵画を教科として設置することを望ましく思っていなかった。けれども花蹊は、私立学校として独自の教育方針を貫いていたところ、教育博覧会の出品作の件を機に、文部省の方針がガラツと変わったという挿話を、やや得意げに書き留めているわけである。この書画の重視に関しては、実はまた別な場面で、跡見の名を世に知らしめるものとして、大きな役割を果たすことになった。ひとつは雑誌の場であり、ひとつは宮中の行事においてである。

たとえば作家で評論家でもあった内田魯庵は、明治十年（一八七七）に創刊された日本初の子ども向け投稿雑誌『穎才新誌』の思ひ出を記す中で、跡見のことにふれている。

其頃穎才新誌が初めて発行されたが、運動競技も唱歌も教へられなかつた当時の小学校生徒の他流仕合をするこの穎才新誌は全国（殊に東京）小学校の児童の晴れ舞台だつた。看板

となつたのは第一頁の書画欄で、殆んど跡見学校が独占して三条公の令嬢(後の閑院宮殿下)を初め、名流貴族の満六歳乃至満八歳といふ若い令嬢の花蹊女史ソツクリ其のままの筆蹟や画が毎号を賑はした。<sup>55)</sup>

表紙を飾る跡見の生徒たちの作品は、十分な宣伝効果を果たしていたことが分かる。私立学校の名を世に知らしめる上で、それが大きな影響力を持ち得たことは容易に想像できる。おそらくそこには、花蹊の戦略があったはずだ。しかも作品の主は、名流貴族の令嬢たちである。この二重の衝撃は、跡見の名と、そのブランド力を世に知らしめ、高めることに寄与したにちがいない。

#### 四、取り巻く人々

京都に続いて東京でも、花蹊の評判が高まる契機となつたのは、姉小路家、そして三条実美の存在がある。姉小路家の外戚にあたる跡見家の人々は、公知の妹である良姫と遺児公義、このふたりと行動を共にすることが多かった。上京後しばらくの間、花蹊は姉小路家に身を寄せており、そこで公家の娘たちを教え始めた。このことが、東京での私塾経営、さらには学校創設につながったという。

其頃は別に女学校はありませんから、上流社会では教師を雇うて漢学、和文、習字、和歌など習はせて居りました。私は

上京後、姉小路さんの邸宅に居ましたが、邸宅が広い為めに、京都出身の公卿方から、私の娘も預つて呉れ、私の娘も教育して呉れと申されましたので、諸方から御嬢さん達を預りました。其れに三条公は、跡見なら大丈夫だからと云つて、今の閑院宮妃殿下なる智恵子様を、六歳の時よりお預けになりました。三条さんがお預けになるからと云ふので、中山さん、万里小路さんを始め、諸方から申込まれて、遂に四十余人を引受けることになりました。<sup>56)</sup>

姉小路家はもちろんのこと、注目すべきは三条実美である。実美の娘智恵子は、先の『穎才新誌』の表紙を飾るのみならず、後の明治二十一年(一八八八)、小石川柳町への学校移転の際に生徒総代として祝文を寄せるなど、代表的な卒業生として、跡見の名を高めることに貢献している。実美にとっても花蹊は、娘の師であるばかりでなく、前述のとおり宮中の改革において重要な存在であったと考えられる。

そこで花蹊の日記を追っていくと、公知の叔父で、七卿のひとりとして実美と行動を共にした澤宜嘉が、花蹊の出世に自身が図った便宜を言い募る場面に出会う。<sup>57)</sup> それによれば、花蹊の姉千代滝を姉小路家に世話し、外務卿として外務省に花蹊のことを周旋して御用画の依頼につなげ、花蹊を御所に呼ばれるようにした、等々、いずれも澤自身によるものと主張している。そのすべてを鵜呑みにはできないものの、実美同様、尊王攘夷派の公家の支

援を受けて、花蹊が宮中や外務省をはじめとする政府機関とも近づきになっていったことは間違いない。ちなみにこのとき、澤が花蹊に恩着せがましい物言いをしたのは訳がある。澤はロシアへ行くこととなり、それに同行する娘付きとして、花蹊に渡航を依頼した。けれども花蹊はそれを断っていた。

実はこの時期、花蹊は女教院の権訓導就任の打診を受けていた。明治五年（一八七二）三月、神祇省が廃されてかわりに教部省が設置され、それに伴い、国民に向けて尊王愛国思想の教化を図る大教院を設置し、教導職を任命して教化にあたらせることになった。女性の教導職養成機関としては女教院が設立され、姉小路良姫はその代表である大講義に就任することとなり、花蹊も権訓導として女教師の人選を委嘱された。結果的には、明治八年（一八七五）の跡見開校の前に、花蹊は権訓導は辞職することとなるが、明治政府の宗教改革において、良姫とともに教育面での主導的役割を充てられていた。

さらにいまひとつ注目したいのは、教部省設置とともに教部大輔となった福羽美静とのつながりである。福羽は五月に教部大輔を致仕しているが、花蹊が宮中揮毫の際、福羽が何度か同席していたことは日記で確認できる。<sup>28</sup> 明治二年（一八六九）より、明治天皇の侍講として、美静は天皇のみならず美子皇后の身近にもあった。『木園福羽美静小伝』には、明治五年（一八七二）七月に次の記事を見る。

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみる知の継承と明治初期の女性教育 ——

（榊原）

一一

七月廿七日、宮内省三等出仕を拝命し、主として 主上、学問の事、又、後宮諸職改革のことに当られたり。<sup>29</sup>

福羽もこの時期、宮中の改革に関わっていた。しかも続く明治六年（一八七三）六月の記事には、「女学」に関する皇后の御下問にたびたび答えていたことが記されている。すでに指摘したことであるが、実は、花蹊と福羽の接点は、明治二十五年（一八九二）に博文館から刊行された『雲上女訓 からすまる帖』の序文にも見出すことができる。すなわち、前年に福羽の序文を付して刊行された『からすまる帖』は、翌年花蹊の序を新たに加えて再版されている。

『からすまる帖』とは、室町末期に成立したとされるいわゆる『仮名教訓』系の女訓書である。石川松太郎はその特徴を、「女訓と習字手本とを兼ねた教科書」としている。<sup>31</sup> つまり、宮中の改革を推進しようとした美静のような人物にとって、花蹊は与しやすい存在だった。美静は、幼児の脳裏に植え込む三つのこととして、「帝道の尊儀、王政の態、王民の勤」を挙げ、教育者にその徹底を説いている。<sup>32</sup> 国民の半数を占める女性に「王民の勤」を求め、もって近代国家の「国民」たることを願った美静は、復古的な改正教育令公布の年、明治十三年（一八八〇）に、東京女子師範学校の摂理となった。在任期間はわずか一年ではあったが、美静の着任は、「それまで一時期西欧化日本のシンボリック的存在の観さえ呈した東京女子師範学校の歴史に生じた、国粹主義化というひと

つの曲がり角を象徴する事件」<sup>⑤</sup>とも後に評される出来事だった。

いっぽう花蹊は、市井に開いた自身の学校において、実際の女性教育に携わる教育者であった。福羽は、花蹊の手により施される女性教育と、その影響力に期待を寄せたのではなかったか。跡見に残る法帖のなかでは、『雲上女訓』としてその存在が確認できる『からすまる帖』は、版本となることにより、花蹊の教えに直に接することのできた東京の上流の令嬢だけでなく、広く世の女性たちが手にすることのできる教材となった。そしてこの『からすまる帖』は、美子皇后より東京女子師範附属小学校の児童に下賜されてもいる。<sup>⑥</sup>

## 五、おわりに

『昭憲皇太后史』には、「花蹊女子の事業を御援助」という表題のもとに、以下のような交流ぶりを記した一節がある。

陛下が学事に御心を注ぎ給ひし中に、明治初年、跡見花蹊女史の才筆、未だ世に知らなかつた時、早くも陛下は女史に御目を懸けさせ給ひ、女史の教育事業に御援助遊ばされ、京都より東京に御移りの後、明治五年某日、女史を宮中に召させられて、太公望の釣と関羽の青龍刀を携ふる図を揮毫させ給ひ、御自ら御讃を遊ばされたる事がある。又其の後、陛下三条家へ臨啓の折も、女史に御前揮毫を仰せつけられ、其の筆にな

つた賤の男の早苗採る図に、三条公の讃せられたるを、殊の外賞で給ひて、お持ち帰り遊ばされた事があつた。又、女史が明治八年、神田仲猿楽町に跡見女学校を設立するに及び、生徒に紫の袴を用ゐさせたるも、陛下の御心より出でし事と承はる。其後日に増し、同校の榮え行くをお歎びありて、偏へに生徒の成績の宜しからんを、御奨励遊ばされたと云ふこととであります。而して、明治十三年には、御令姪一条辰子姫を御入塾させ遊ばされ、層一層女史の事業を御援助遊ばされたのである。<sup>⑦</sup>

明治期の女性教育が、跡見学校のみにより先導されていたわけではない。だが、跡見の発展が何によってもたらされたのかについては、明らかにしていく必要がある。花蹊が女性教育に懸けた思い、培ってきた教養、さらにそれらをいかなる形で教育の現場に活かしたかといった教育内容と方法の独自性はもちろんであるが、花蹊を取り巻く人々の存在も忘れてはならない。花蹊の教育活動は、尊皇の志をもつ人々や宮中の改革を推し進めた人々による政治的な動きと密接な関わりをもっていた。花蹊は、自身の志とともに、周囲の人々の期待にも応える形でその能力を発揮し、もって「世界の花」となる道を歩もうとしたのである。

## (注)

- ① 跡見花蹊の日記の引用は、花蹊日記編集委員会編『花蹊日記第一巻』（二〇〇五年、跡見学園）および同書所収の自筆略歴「花蹊日記第八号」「花蹊日記第九号」による。但し、濁点、句読点については引用者により、割注は「」内とした。
- ② 『跡見学園二二〇年の伝統と創造』第一部跡見花蹊の創意（二〇〇五年）。注②参照。
- ③ 注②参照。
- ④ 『跡見学園教育詩藻』（一九九五年、跡見学園）所収。
- ⑤ 以下、『明治天皇の御製百首』と「花蹊女史の遺稿」の引用は、「跡見花蹊伝」編集委員会『跡見花蹊女史伝』（一九九〇年、跡見学園）による。
- ⑥ 引用は、奈良女子大学附属図書館「所蔵資料電子画像集 女性関連資料」明治十九年（一八八六）版による。
- ⑦ 関口すみ子『御一新とジェンダー 荻生徂徠から教育勅語まで』（第二編 文明の国へ）（二〇〇五年、東京大学出版会）。
- ⑧ 注⑦参照。
- ⑨ 注②参照。
- ⑩ 注⑦参照。
- ⑪ 美子皇后が手にし、読んだ『女四書』は、和文で大意を要約した辻原元甫版ではなく、西坂成庵の手になる『校訂女四書』である。
- ⑫ この点に関しては注⑦のほか、若菜みどり『皇后の肖像 昭憲皇太後の表象と女性の国民化』第三章 皇后のモラル——女訓書と儒教（二〇〇一年、筑摩書房）にも指摘がある。
- ⑬ 注②参照。
- ⑭ 注④所収「跡見花蹊女史の女子教育追懐談」。
- ⑮ 「跡見花蹊伝」編集委員会『花の下みち』（一九九〇年、跡見学園）。
- ⑯ 注②参照。
- ⑰ 櫛田眞澄『男女平等教育阻害の要因 明治期女学校教育の考察』「第四章 教養系女学校の建学精神とカリキュラムの分析」（二〇〇九年、明石書店）。
- ⑱ 植田恭代『源氏物語』からみる跡見女学校の教育——明治・大正期を中心に——（『跡見学園女子大学文学部紀要』二〇〇四年三月）、『跡見女学校の教育——折り手本「道の栞」から——』（『跡見学園女子大学文学部紀要』二〇〇五年三月）、『跡見女学校の教育と古典文学の教養——折り手本「四季のふみ」から——』（『跡見学園女子大学文学部紀要』二〇〇六年三月）。
- ⑲ 植田恭代『跡見女学校の教育と古典文学の教養——折り手本「四季のふみ」から——』（『跡見学園女子大学文学部紀要』二〇〇六年三月）。
- ⑳ 注⑱参照。
- ㉑ 岡本かの子『お師匠さんの風貌を偲びて』（『岡本かの子全集』第十四巻、一九七七年、冬樹社）所収。
- ㉒ 杉本鏡子・大岩美代『武士の娘』（一九九四年、筑摩書房）。
- ㉓ 榊原千鶴『明治二十四年の「からすまる帖」——福羽美静にみる戦略としての近代女性教育——』（『名古屋大学文学部研究論集』二〇〇九年三月）。
- ㉔ 注④所収「跡見花蹊女史の女子教育追懐談」。
- ㉕ 注④所収の内田魯庵『明治十年前後の小学校』（太陽増刊『明治大正の文化』）。
- ㉖ 注④所収「跡見花蹊女史の女子教育追懐談」。
- ㉗ 『跡見花蹊日記』第一巻（二〇〇五年、跡見学園）所収『花蹊日記第六号』（明治六年五月十八日条）。
- ㉘ たとえば、『跡見花蹊日記』明治五年十一月八日、明治六年二月十二日、同年十月二十五日の各条。
- ㉙ 加部巖夫『木園福羽美静小伝』（一九〇八年、福羽逸人）。
- ㉚ 注⑲参照。
- ㉛ 石川松太郎『仮名教訓』系の女子用往来（『江戸時代女性生活研究』一九九四年、大空社）。
- ㉜ 注⑲所収、福羽美静「幼児に対する昔話」。
- ㉝ 『お茶の水女性大学百年史』「総説 第一章 東京女子師範学校時代」（一九八四年、『お茶の水女性大学百年史』刊行委員会）。
- ㉞ 奥田環、矢越葉子『女高師と皇室 大学資料調査の成果と課題』（『お茶の水



## 名古屋大学文学部研究論集(文学)

女子大学人文科学研究『二〇〇八年三月』。

③ 上田景二『昭憲皇太后史』(一九一四年、博文館)。

本稿をなすにあたって、跡見花蹊に関する知見をご教示くださった花蹊記念資料館学芸員渡辺泉氏、『からすまる帖』の閲覧をご許可くださった跡見花蹊記念資料館にお礼申し上げます。

なお本稿は、文部科学省科学研究費(基盤C)による成果の一部である。

## Abstract

### Atomi Kakei and women's education

Chizuru SAKAKIBARA

Atomi Kakei was born in Osaka in 1840. She was studying hard at an early age, the results were excellent. She studied Japanese literature and Chinese classics, was also talented in painting and calligraphy. Her family and her father's employer expected her to succeed by her wonderful talent. She opened a private school in Osaka, and taught the daughters of the nobility. Her private school was a very high reputation in the Kansai region.

Kakei went to Tokyo in 1870 with her family. Kakei was the owner of *sonnō jōi* thought (Revere the Emperor, Expel the Barbarians), was to worship Japanese emperor. Kakei supported the educational policy that the emperor and the empress advanced. Kakei cooperated with the reform of the imperial household's old custom. Kakei founded the school of Atomi in 1875. Atomi school was a private school that had been built for the first time in Japan for the woman. Many noble daughters, in Atomi school, were educated to become a submissive housewife so excellent. In Atomi school, the teaching of penmanship was very important. Students were practicing writing letters beautiful, and Kakei intended to acquire a strong mental power by calligraphy. Kakei handed out to students the text of the manuscript. Students learnt teacher's educational concept and ideal by Kakei's text.

「世界の花とならむ事を望む」

—— 跡見花蹊にみる『知』の継承と明治初期の女性教育 ——  
(榎原)